
ネット恋愛

唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネット恋愛

【Nコード】

N4225A

【作者名】

唯

【あらすじ】

ネットから始まった恋の行方は・・・。

第1話

これは、私（勝谷飛鳥）が経験したひと夏の恋。

八月の初め、夏休みの真っ只中。

部活を引退した私たち中三の夏休みは受験というムードでいっぱいだった。

でも私かというと、小学生の頃から続けている空手の推薦で高校が決まっている為、いたってのん気だった。

遊ぶ時間はあるのだが相手がいない。

私の頭の中を『暇』という文字がグルグル回っていた。

何もしないまま夏休みの半ばに差し掛かった頃、私はずーっと欲しがっていたパソコンを手に入れた。

父がボーナスで買ってくれたのだ。

「お父さんありがとー。」

いつもはけむたい存在の父に心からお礼を言った。

父は満面の笑みを浮かべていた。

早速私はパソコンに電源を入れた。

「あ、点いた。」

当たり前だ。点くに決まっている。この時の私は当たり前前の事に感動していた。

とりあえず、インターネットに接続を試してみた。でも私は、何をしたらいいのか分からなくなった。

あれだけ欲しがっていたパソコンなのに・・・。

私はパソコンで何がしたかったんだっけ……。あ、そうだ、チャット……。

ちよっと前にチャットをテーマにした映画を見た私はどうしてもチャットがしたかったのだ。

それを思い出した私は無性にチャットがしたくなった。

>>チャット<<という単語で検索を試みた。ヒット数の多さに驚いた。

ページを見ていくうちにチャットにも色々な種類がある事が分かった。

複数の人数で話すことの出来るチャット、二人までしか入室出来ない2ショットチャット、映像を見ながら話せるライブチャットなど。

ライブチャットというのはエッチな事を目的としたものが多い様なので選択肢から即外した。

「どうしょ・・・。」

結局まだ文字を打つのが遅い私は、2ショットチャットをする事にした。

HN>>ハンドルネーム<<は『綾』で入室。私は待機をする事になった。

入室前の相手から分かる『綾』の情報は十代という年齢だけ。しばらくすると、待機中の『綾』の部屋に入室者が。

入室者の名前は『たかし』

『綾』と『たかし』の会話が始まった。

第2話

たかし：綾ちゃん、こんにちは。

たかしは入室するなりすぐに発言をしてきた。

「うわぁ、早く返事打たなきゃ」

早く打とうとするのだが気持ちばかりが焦って上手く打てない。
やつの思いで>>こんにちわぁ<<と一言打った。
しかし画面を見るとたかしの発言でいっぱいだった。

たかし：十代っていくつなの？

たかし：綾ちゃん、ドコ住み？

たかし：彼氏とかいるの？

たかし：打つのゆっくりだねw初心者なのかなw？（笑）

私はパソコン初心者。とてもじゃないけど、たかしのスピードにはついていけなかった。

でも何となく楽しかった。というより、今自分がチャットをしているという事が嬉しかった。

綾：15歳ですw

綾：静岡ですw

綾：この間別れちゃって・・・。

綾：遅くてごめんなさい・・・初心者なのw

なんとかたかしの発言全てに答える事が出来た。

>>初心者なの<<と言ったら、たかしは打つスピードを合わせてくれた。

それよりも何故か私は>>この間別れちゃって・・・.<<とあり

もしない発言をした。

実際別れたのは何ヶ月も前。たかしを誘っているのか？と自分で自分に問い掛けた。

顔も年齢も知らない相手を誘う……。なんてミジメなんだろう……。

誘っている訳がない！自分の中で答えを出した。

が、実際私のしている事はたかしを誘っていた。それも自分のどこかで分かっていた。

たかし：15歳かーw若いなあw俺は25だけどいいかなw？

綾：年齢なんて関係ないよおw

明らかにたかしを誘っていた。

ミジメな事をしていいると思いつながら私も私は楽しんでた。

しばらく恋愛から遠のいていた私は、久し振りに女を出し始めていた。

第3話

たかし：てか綾ちゃん今フリーなんだ？

綾：うん；；寂しいよお；；

たかしは、確実に『綾』に興味を持ち始めていた。

『綾』に興味があるという事は、私に興味があるという事。

私に興味を持ってくれている人がいるという事は、一種の快感だった。

相手が誰だろうと快感だった。

たかし：実は、俺も今フリーなんだよねw綾ちゃんと一緒w

綾：あはw一緒だねえw

たかしが下心を出し始めた。

無論、出させたのはこの私なんだけど。

たかし：あー、ヤバ。もおバイトの時間だ；；また、綾ちゃんと話したいからメアド交換しようよ！

メアドの交換・・・たかしは、初めからこれが目的だったのだろうと思った。

それよりもどうしよう・・・。顔も知らない、まだ少ししか喋っていないたかしと、メアド交換していいものなのだろうか・・・。

綾：いいよおwアタシも、たかしさんとまたお話したいしw

たかし：やったあwじゃあアド載せるねw

別に、たかしとまた話しがしたかった訳じゃない。メールがしたか

った訳でもない。

ただ・・・女友達で埋め尽くされた携帯のアドレス帳がむなしかった。

誰でもいい・・・つまり、たかしでもいいから男の人をアドレス帳に加えたかった。

たかし：じゃあ落ちるねwメール待ってるねw

>> たかしさんが退室しました。<<

綾：はぁーいwまたねえw

何度も言うが、打つのが遅い私はたかしが退室した後に返事をした。何となくマヌケな感じがして、ちよつと恥ずかしくなった。

初めてのチャットで疲れたし、私も落ちる事にした。

第4話

退室をした私は、パソコンの電源も切った。

たかしと少ししか話していないのに、時計を見ると30分以上経過していた。

多分、私のタイピングが遅いからだろう。

目が異様に疲れた。コンタクトが乾いている。

「はぁー・・・目薬どこだっけ・・・」

夏は目薬をほとんど使わない私は、5分くらい探してやっと見つかる事が出来た。

目に水分が補給された。

水分が補給されたところで、私はたかしにメールを打つ事にした。携帯を片手にベットにダイブする。

「はぁー・・・幸せえー・・・」

何故か私は毎回ベットにダイブ、そして毎回幸せを感じる。小さな幸せを感じる。

幸せを十分感じた私は、たかしにメールを打ち始めた。

打ち始めたのはいいが、なんとなく文面が気に入らなく何度も消した。

打っては消し、打っては消した。

>>綾です。メールしてみました。バイト頑張ってね。<<

結局は、ありきたりというか、無難というか・・・とにかく何分も時間を掛けて>>綾です。メールしてみました。バイト頑張ってね。<<という文字を打ち、送信ボタンを押した。

なんだか開放感があつた。仕事をやり終えた様な。

しばらく机の上に置いた携帯を眺めていた。

たかしからの返信を期待している自分がいた。

でも、携帯が鳴ることも、光ることもなかった。

本当にたかしはバイト中なのだろう。何故だかホッとした。

ん・・・？たかしがもし、すぐに私のメールに返信していたら、私はたかしに何て返しただろう。

きつと・・・>>バイト中じゃないの！？<<こう返していたと思う。私の性格上・・・。

でもおかしい。ただのメル友のたかしに、どうしてこんなにも干渉しなければならぬのだろう。

『たかし』が『綾』にはまっっていく様に、『綾』も『たかし』にはまっっていく感じがした。

この感じは懐かしくもあり、少し怖いとも思った。

こんな事を考えているうちに、私はいつの間にか眠りについていった。

第5話

夢を見た。

見知らぬ男性とデートをする夢。

手を繋いで買い物をして、おそろいのストラップを買って・・・。

私は、その男性が『たかし』だと思った。

しばらく私は、夢の余韻に浸っていた。

窓を開けると、少しひんやりとした風を肌に感じた。

一気に目が覚めた。

すると、昨夜お風呂に入らず寝てしまった事を思い出した。
なんだか身体が汗ばんでいる様に感じてきた。

「お風呂に入ろう」

私は下着とノースリーブ、ズボンを持って部屋を出た。

階段を降りると、すぐキッチンに出る。

キッチンでは中一の弟、陽介が朝食を食べていた。

「お姉ちゃん、おっはー」

「・・・あんた、おっはーって」

今時、あいさつに>>おっはー<<なんて使う人は滅多にいない。
レアキャラだ。

「ねえ、お母さんは？」

「何かねえー電話かかってきてねえーさっき仕事行ったよー」

陽介の喋り方は独特だ。なんというか・・・スローペース？

陽介と話していると、こっちまで喋り方がスローになる。

「ふーん・・・ってまだ9時前じゃん！」

「緊急事態発生みたいだよー。お母さん大変ーって叫んでたもん」

「へえー・・・」

・・・叫んではないでしょ。心の中でツツコミを入れてみた。

それより保険会社に勤めている母は、最近大変そうだ。

今日、母が帰ってきたらマツサージでもしてあげようかな・・・。

洗面所のドアを開けると、夏だというのに冷たい空気ではいっぱいだ
った。

私は持ってきた着替えを洗濯機の上に置いて服を脱ぎ始めた。

シャツを脱ぎ、ブラを外すと、中三にしては十分すぎる胸が露にな
った。

短パンを脱ぎ、パンツを脱ぎ、私の身体を隠すものが何一つ無くな
った。

第6話

お風呂場に入ると、正面に全身が映る鏡がある。私は、自分の全身が映るように鏡の前に立った。

「キレイな身体・・・」

事実だった。でも事実ではない。・・・矛盾している。

胸は大きい。けど、スタイルがいい訳ではない。だからキレイな身体とは言えない。

でもキレイな身体なのだ。

キレイというより、汚れてないという方が適切なのかもしれない。

誰一人として、まだ私の身体に触った人はいない。

だからキレイな身体・・・。

私は、このキレイな身体をめっちゃめっちゃにして欲しくなった。

誰でもいいから汚して欲しい。

こんな事ばかり考えている私は変態なのか？と自分でも疑問をもった。

それでもやっぱり考えてしまう。

友達も、こんな事考えてたりするのかな・・・。

友達も、もう汚れた身体になったのかな・・・。

>> 欲求不満くくという言葉が頭に浮かんた。

欲求不満ってやつなのかな・・・。分からないけど・・・。

蛇口をひねると、一気に冷たい水が出てきた。

「うあつ、冷たっ」

私は正気に戻った。・・・初めから正気なのだが、もう考えるのはよそう。

自分で気持ちをセーブ出来るものなのか分からないけど、とにかく出来るだけ考えないようにしよう。

お湯の出てきたシャワーを自分の身体に向けた。

お風呂場の中は熱で暖かくなっていた。

正面の鏡も曇っている。

「あ・・・タオル・・・」

身体を拭こうとした私は、タオルをもってくるのを忘れている事に気付いた。

洗面所に顔を出し、私は迷う事なく大声で言った。

「陽介！タオル持ってきて！」

隣の台所で

「はいはい」

と陽介が返事をした。

まだ食べていたのか・・・。食べるのもスローだなあ・・・。

普段の私なら口に出して言っていただろう。

でも、ここは頼み事をしているので口には出さなかった。

第7話

「お姉ちゃん、タオル持って来たけど？」

洗面所のドア越しに陽介が言った。

「あーありがと。洗濯機の上に置いて」

洗面所に顔を出した私は、言い終わるとお風呂場のドアを閉めた。

>>カチャ<<ドアの開く音と共に人の気配。

陽介の姿が、ドア越しに確認出来た。

なんだか緊張した。じっとしていた。いや、動けなかった。

胸が高鳴っているのが分かった。

>>パタン<<ドアの閉まる音と共に、人の気配は無くなった。

金縛りが解けた様に、私の身体は動きを取り戻した。

陽介が持ってきたタオルで身体を拭き、服を着た。

洗面所のドアを開けると、そこではまだ陽介が朝食を摂っていた。

・・・少し呆れた。

モゴモゴと口を動かしている陽介を横目に、私は自分の部屋に戻った。

部屋は凄く暑かった。

なぜかというと、お風呂に行く時なぜか窓を閉めていた。

「あつち」

せっかくお風呂に入ったのに、もう汗ばんできた。

私は急いで窓を開けた。扇風機を>>強くにした。

机の上に置きっぱなしになっていた携帯に目がいった。

そういえば、起きてから一度も携帯を触っていなかった。

私は、机の上の携帯に手を伸ばした。

サブ画面にメールのマークがあった。

誰からのメールなのか、予想はついていた。

携帯を開いて、メールの受信ボックスを見た。

新着メールは三通だった。

一番初めに届いていたのが予想通り『たかし』からのメールだった。

受信時刻・・・1：53分。熟睡していた時間だろう。

『たかし』からのメールを開く前に、残りの二通は誰からなのか確認する事にした。

受信時刻・・・6：25分。友達の『知美』からだった。

友達グループの中でも特に仲のいい知美。だから>>友達<<より

>>親友<<って呼んだ方がいいのかな・・・。

最後のメール。

受信時刻・・・9：14分。・・・『隼人』・・・。

三ヶ月前に別れた大好きだった彼。

別れてから初めて来た『隼人』からのメールだった。

第8話

私は携帯を手にしたまま、しばらく固まっていた。

隼人はなんで今更、私にメールを送ったのか・・・。

凄く気になった。

でも、なんだか見るのが怖かった。・・・>>怖い<<と思う理由などないのだけれど。

とにかく内容を見なければ。

私は『たかし』と『知美』のメールを後回しにして『隼人』のメールを見る事にした。

本文を開くボタンを、なかなか押せなかった。

指が震えて押せなかった。

でも、少し指に力を入れると簡単にボタンを押せた。

本文が表示された。

私は、反射的に顔を画面から背けていた。

恐る恐る画面の方へ視線を向ける。

内容はこうだった。

>>えー。江戸時代だって！斉藤も江戸時代だって言ってたし。<<

・・・は？意味が分からない。

江戸時代って何？斉藤って誰やねん！

ただはつきりしているのは、このメールは隼人が私に送ろうとしていたものではなく、間違って私に届いたという事だけだった。

なんだか腹ただしかった。

間違いメールを送って来た隼人にも、そんな隼人にちょっと期待していた自分にも。

私はメールが間違って届いた事を隼人に知らせるのをやめる事にした。

どうせくだらない内容の様だし・・・。
それより何より、3ヶ月ぶりのメールがこんなメールっていうのが
嫌だった。

次に私は『知美』からのメールを開いた。

>>おはよう。朝早く起きちゃったのでメールしてみましたあ 夏
休みも残り半分。思い出作ろうよ！<<

「知美早えーよ・・・。」

確かにメールの受信時刻は朝早かった。

でも私はこのメールを見てちよつと嬉しかった。

私も、このまま何もない夏休みは寂しいと思っていたから。
意思の疎通というか・・・さすが知美だなと思った。

第9話

私は知美に返事を送ろうと思った。
でもその前に、『たかし』からのメールを開く事にした。

>>綾ちゃん、メールありがとね！バイトの休憩中に見ただけど
元気出たよ（笑）またメールしてね。いつでも待ってるから！<<

・・・軽い男。

ついさっきまで『たかし』にはまりかけていたのに、何だかもう冷
めていた。

こんなメールだって何人の女の子に送ってるんだか・・・。

『たかし』にはまりかけていた自分が恥ずかしく思えた。

『たかし』からのメールを閉じ、『知美』からのメールを再び開い
た。

知美に返事を打った。

>>ホント早起きしたね（笑）アタシその時間爆睡してたよ！てか
遊びに行きたいね。みんな勉強勉強言ってるけど、息詰まりそー。
あ、そいえば隼人からメール来た。内容知りたい？（笑）<<

知美には何でも話せる。

ツライ事も、悲しい事も。

正直言うと何でも話せる友達・・・親友は知美だけなのかもしれな
い。

隼人にフラれた時、黙って話を聞いてくれたのも知美。

ずーっとそばにいてくれたのも知美。

ホントに感謝してる。

知美に返事を送るとする事がなくなった。

「チャットでもするかー・・・」

>>チャットでもくくという言い方はおかしかったかもしれない。
なぜなら、私はチャットにはまっていた。

確実にはまっていた。

パソコンが起動するのに少し時間がかかる。

じれったい。テレビみたいに一発で点けよ！と、どうしようもない
事を思ってみた。

そんな事を考えてるうちに携帯が光った。

『知美』から返事が来た。

第10話

>>隼人、今更何だつて？<<

『知美』からのメールにはたった一言だった。
でも、その一言に凄く重いものを感じた。

3ヶ月前、公園に呼び出された私は隼人にフラれた。
中二の夏から9ヶ月間の恋が終わった。

終わりを告げたのは隼人の

「なんか・・・俺ら付き合ってる感じしないよね。飛鳥、キスだつてさせてくれないし」

その言葉を聞いて私の頭の中で何かが音を立てて崩れた。

一緒にいられるだけで幸せ・・・そう思っていたのは私だけだった。

「そうだね・・・前みたく友達でいようか」

今思うと、よくこんな言葉が出たなあと思う。

「おう。じゃ、友達って事でヨロシク！」

「うん」

何が友達だよ。

もう、友達には戻れない事は分かっていた。

実際友達には戻れなかった。

フラれた私の足は、自然と知美の家に向かっていた。

>>ピーンポン<<・・・チャイムが鳴る・・・。

「はい」

玄関に出てきたのは知美の兄の雅宏くんだった。

いつもお互いの家で遊ぶ私と知美。

だから私は雅宏くんの事をよく知っていた。

雅宏くんも私の事をよく知っていた。

「おお飛鳥ー。．．．どうした？」

私の目からは大粒の涙が溢れていた。

隼人に別れを告げられた時、涙は一滴も出てこなかった。

．．．本当は溢れそうな涙を必死でこらえた。

隼人の前で泣きたくなかった。

フラれて泣くのはミジメな気がしたから．．．。

必死でこらえていたけれどもう、限界だった。

雅宏さんの優しい顔は私を安堵感で包んでくれた。

その安堵感で素直な私の気持ち、涙が溢れたのだと思う。

「．．．知美と話がしたい．．．」

かすれて消えそうな声で一言言った。

第11話

「とりあえず中入れよ。知美、すぐ呼んで来るから」
そう言つと、雅宏くんは私をリビングに上がらせて階段を駆け上がった。

涙が止まらない。

止まる気配もない。

何に對して泣いているのか分からなくなってきた。
別れたくなかつたから泣いているのか・・・。
隼人との気持ちの違いに泣いているのか・・・。

「飛鳥・・・どうした？」

さつき、雅宏くんが掛けてくれた言葉と同じだった。

知美は私の隣に座った。

私から話すのを待っている。

話さなきゃ・・・早く話さなきゃ・・・。

なのに言葉にならなかった。

聞いてもらいたい事はいっぱいあるのに。

なかなか言葉に出来ない私に、知美が口を開いた。

「隼人に泣かされたの？」

私は一瞬ビクつとした。

そしてコクリと頷いた。

どうして知美には分かっちゃしまうのだろう。

というより分かってくれるのだろう・・・。

涙がだんだんと枯れてきた。

「許せない」

知美が一言言つた。

その時の知美の声は、今でも忘れない。
低音で怒りに満ちた声。

隣にいた私は、少しゾクつとした。

落ち着いてきた私は静かに口を開いた。

「今・・・隼人にフラれちゃった・・・。何かねー・・・アタシと付き合ってる感じがしないんだって」

知美は黙って頷いている。

何もかも見透かしている様に。

私は話を続けた。

「・・・アタシは・・・アタシは・・・隼人と一緒にいられるだけで幸せだった・・・。でも・・・隼人は違ったみたい・・・。」
そう言い終ると、知美は全てを理解した様だった。

「飛鳥・・・アタシはやっぱ隼人が許せないよ・・・。飛鳥が好きになつた男だけど・・・許せない」

知美の目は赤くなっていた。

そして知美は、私の胸で泣いた。

「何で知美が泣くんだよ・・・。」

私の目にも、また涙が溜まっていた。

第12話

>> 久し振りに何かと思っただら間違いメールだったよ。隼人ってばドジだよ。<<

隼人からのメールに私は動揺した。

でも、そんな事誰にも悟られなかった。

だから精一杯平然を装って知美にメールを返した。

・・・知美の事だから無理してるのバレバレなのだろうけど。

携帯を机に置いてパソコンに向かった。

昨日と同じサイトに行き、同じ様に入室した。

モチロンHNは『綾』

今日は平日の昼間。（夏休みだけど）

みんな塾とか仕事で忙しい様であまり人はいなかった。

『綾』待機中。

>> ブブツ<< 携帯のバイブが鳴った。

サブ画面を見ると、メールではなく着信だった。

『知美』と表示されている。

「はい。飛鳥ですよー」

何を言っているんだ・・・私は。

「分かってるから。分かってるから電話してんじゃん」

知美は冷静に言った。

「そおだね（笑）で、ご用件は？」

「あー・・・隼人からメール来たって言ってたじゃん。間違いメール。それで飛鳥、隼人に間違ってた届いたって事知らせたのになって気になって」

何で知美はそんな事が気になったんだろう。

「あー、知らせてないよー。でも何でそんな事気になったの？」
最もな質問だ。

「んー・・・いや、知らせてたらそっからまたメールのやり取り始まっちゃうじゃん？そしたら飛鳥が隼人許した事になっちゃうからさ」

・・・別に許すも許さないもどっちでもいいと思った。

でも、もう一度・・・あの時・・・付き合ってた時みたたく隼人とメールがしたい・・・そんな感情が私の中に顔を出した。

「・・・しないよ、もう隼人になんてメールしない」

「そっか。良かった。あ、今度遊びに行こうね。中学最後の夏休みだし！」

「うん。行く行く」

「じゃあ、またメールする。いきなりごめんよ（笑）」

「いえいえ（笑）じゃーまたね」

知美ごめん・・・。

アタシ隼人とメールしたいよ。前みたたく・・・無理なの分かってるけど一度好きになった人とこのままじゃ嫌だもん・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4225a/>

ネット恋愛

2010年11月24日09時03分発行